

楫西光速の塩業研究に見る渋沢水産史研究室の 経済史学的一面

The Economic History Aspect of the Shibusawa Fisheries History Institute
in Kajinishi Mitsuhaya's Salt Industry Research

星 洋和

HOSHI Hirokazu

要 旨

本稿は、アチック同人の一人であった楫西光速（1906（明治39）年～1964（昭和39）年）の塩業研究から、水産史研究室における経済史学的一面について考察するものである。

1938（昭和13）年4月、研究の道を志して故郷の大阪を出てきた楫西は、学生時代の恩師である土屋喬雄の紹介により渋沢敬三と出会い、アチック・ミュージアム（以下、アチック）に加入した。この時、楫西は塩業研究を担当することとなった。

楫西がアチックに加入した年は、日中戦争の真ただ中であり、物資の統制が進められていた時期であった。このような状況下で、楫西は史料整理を行いながら、日本塩業史についての研究を始める。1938年9月、楫西はアチックマンスリーで「近世塩業史の諸問題」を発表し、日本塩業の諸問題として、起源、開発・維持、塩業政策、製塩技術、燃料、休浜、経営形態といった七つの問題を提示した。それらは、日本資本主義の成立を考える上で重要な、経済史的な問題を含むものであった。以後、楫西は自らが掲げた課題を明らかにするために、渋沢や土屋の指導のもと、塩業研究に取り組んでいった。

1941年12月になると、日本の対外戦争はアジア・太平洋戦争へと発展した。日中戦争以来、日本国内では塩の不足が深刻化していた。そして、塩の統制が強められ、増産が至急の課題となるにつれ、その影響は楫西の研究にも現れ始めた。それは、アチックに向けられた社会的期待に応えてのことでもあったが、そのような状況でも楫西は、経済史的な観点から塩業研究に、取り組み続けた。

第二次世界大戦の終結後も、楫西は塩業の研究を続けた。1961（昭和36）年には、日本塩業研究会の顧問に宮本常一とともに就任し、後進の指導に当たったが、1964年3月に同研究会の席上で心筋梗塞を起こし、死去した。楫西の死の翌年に刊行された彼の著作集『日本産業資本成立史論』で述べられているように、楫西の研究人生は「塩」に始まり、「塩」で終わったのである。

【キーワード】 土屋喬雄、専売制度、七つの問題、戦時体制、製塩技術史

1. はじめに

本稿は、アチック・ミュージアム（以下、アチック）の同人の一人であった楫西光速^{かじにしみつはや}（1906（明治39）年～1964（昭和39）年）による塩業研究の分析を通して、渋沢水産史研究室がもっていた経済史学的一面について考察するものである。

1938（昭和13）年4月、故郷の大阪から上京してきた楫西は、東京帝国大学在学時の師である土屋喬雄の紹介で、渋沢敬三が運営するアチックに入所し、祭魚洞文庫⁽¹⁾に勤務することとなった。アチックでの楫西の研究担当は日本塩業史であった。彼はアチック在籍中に『下総行徳塩業史』[『アチックミュージアム彙報』第49号、1941]や「明治年間に於ける枝条架製塩並に機械製塩」[『渋沢漁業史研究室報告』第1輯、1941年]、「製塩業に於ける釜竈の変遷」[『渋沢水産史研究室報告』第2輯、1942]などの成果を出している。アチックの解散後も、楫西は塩業の研究を続け、晩年には宮本常一とともに日本塩業研究会の顧問も務めた。

楫西が取り組んだ塩業研究は、戦後、塩業研究者や経済史学者から高い評価を受けている。例えば、日本塩業研究会の会誌である『日本塩業の研究』第1集の序文では、日本塩業研究の先達として、土屋や渋沢と共に、楫西の名前が挙げられている[日本塩業研究会編、1958]。また、楫西の死後に刊行された、楫西の論集『日本産業資本成立史論』の解題では『下総行徳塩業史』を、「従来、経済史研究にとっては、全く手の付けられていなかった塩業史についての画期的な研究」であり、「日本経済史の進歩に対して大きな寄与をなした」ものであると高い評価が与えられている[楫西、1965、242頁]。

このように、楫西の研究人生においてアチックでの研究生活は、研究者としての基礎が作られた重要な時期であったことが分かる。しかし、楫西の研究者としての基礎が作られたと言える、アチック在籍時の彼の活動や研究の内容については、これまで十分に考察がされてこなかった。その理由としては、楫西自身が他のアチックメンバーのように回顧録に当たるようなものを残していないこと⁽²⁾、そして彼自身が戦後、民俗学とは異なる経済史の分野へと進んだことなどが理由として考えられる。アチック時代の楫西については、同じくアチック同人であった桜田勝徳が、『日本常民生活資料叢書』第4巻水産篇（3）の中で、わずかではあるが言及している[桜田、1973]。桜田は解説の中で、行徳地方や瀬戸内沿岸部における製塩の研究に着手していたことについて触れているが、楫西の研究そのものの特徴や彼自身の問題意識についてはほとんど述べていない。また、山口和雄は、『黒船から塩の道まで』の中で、アチック在籍時の楫西のことについてたびたび言及している[山口和雄古稀記念誌刊行会編、1978]。しかし、山口も楫西の研究については、塩の研究をしていたことに触れるのみで、楫西の研究の内容や問題意識については触れていない。

以上を踏まえて、本稿では、アチック在籍時の楫西がどのような問題意識を持って塩業研究に取り組んでいたのかを、楫西の著作から分析し、明らかにする。特に、本稿では楫西の塩業研究の分析を通して、渋沢水産史研究室に関する二つの事柄を明らかにしたい。一つ目は、水産史研究室の経済史学的な一面である。アチックの関係者による塩の研究と言えば、渋沢の「塩俗問答集」や宮本常一の「塩の道」などが知られる。これらの研究は、人類学的・民俗学的な関心に基づくものであるが、楫西の塩業研究を見ると、明らかに渋沢らの研究とは性格が異なることが分かる。本稿では、当時の学界の状況や、楫西の恩師であった土屋喬雄が彼に与えた影響などに着目して、楫西の研究の特徴を明らかにする。二つ目は、戦時体制下でのアチックの研究活動についてである。戦時下におけるアチックと言えば、1942年に日本常民文化研究所に改称されたこと⁽³⁾、戸谷敏之のよ

うに召集されたアチック同人がいたこと⁽⁴⁾などがよく知られている。しかし、戦時体制の強化が、アチック同人の研究にどのような影響を与えたのかについては、これまで分析が行われてこなかった。本稿では、日中戦争からアジア・太平洋戦争にかけて行われた物資の統制政策、戦時下における塩の不足といった時代背景を抑えた上で、楫西の研究から、その影響を探っていく。

本稿で分析対象とするのは、1945年以前に楫西が執筆した塩業に関する著作である。楫西はアチック在籍時に塩業以外の研究もいくつか行っているが、本稿では塩業研究のみに限定した。その理由は、アチック同人としての楫西の役割を考える上で、また、戦時下におけるアチックに対する社会的期待を考える上で、塩業研究の分析が最も有効的なためである。なお、戦後の楫西の塩業研究については、最後に彼の戦後の動向を述べるにあたり、必要に応じて紹介する。

なお、本稿では必要に応じて、旧字体・異字体を常用漢字に改めた。また、本稿には現在では適切とは言えない表現も含まれているが、筆者はそれ自体がその時代を知る資料であると捉えており、意図的に修正は加えていない。

2. アチック・ミュージアム加入以前——誕生から就職まで——

1906年1月9日、楫西光速は、大阪府大阪市西区新町に生まれた〔楫西、1965、251頁〕。楫西によれば、楫西家はかつて海産物問屋を営んでいた商家であったが、彼の記憶するところではすでに楫西家は商売に手を付けておらず、黒砂糖の樽が蔵に並んでいるだけだったという〔アチック・ミュージアム編、1938a〕。

楫西が後年書いた「お正月今昔」によれば、彼には兄弟姉妹が6人いた。兄弟順は不明だが、楫西には兄と姉がいた。この「お正月今昔」には、楫西家の正月の様子が書かれている。楫西家では正月になると、家の座敷で新年のあいさつを行っていた。正月の朝は早く起こされ、枕元には下着から足袋に至るまで真新しいものが揃えられていたという。座敷には祝膳が並べられており、男は赤、女は黒の祝膳であった。そして、自分の席に着く前に、先に座についている祖父や母、兄、姉に新年のあいさつを行った、子どものころの楫西にとって、新年のあいさつはなかなかの負担であったようだが、その時にお年玉をもらえることが彼の楽しみでもあった。

1918年（大正7年）、楫西は大阪府立市岡中学校に入学し、1923年（大正12年）には大阪高等学校文科甲類に進学した。この間、父や祖父と死別している。1926年（大正15年）4月には東京帝国大学経済学部に入學し、在学中は土屋喬雄に師事した。この土屋との出会いが、彼のその後の人生に大きな影響を及ぼすこととなった。1929年（昭和4年）6月、楫西は東京帝大を卒業。その4年後の1933年（昭和8年）には大阪にある興国商業高校の教諭に就任した。

しかし、楫西は高校に勤める傍ら、研究の世界に進むことも考えていたようである。山口和雄によれば、1936～37年ごろ、蒲田に住んでいた山口のところへ、土屋の紹介を受けた楫西が訪問し、アチックの様子を聞きに来たことがあったという〔山口和雄先生古稀記念刊行会編、1978、289頁〕。そして、1938年（昭和13年）、研究の道に進むことを決めた楫西は、生徒たちに見送られながら、東京へと向かった。この時、楫西はすでに結婚もしており、子どもも2人いた。

3. 研究人生の始まり

1) 渋沢敬三との出会いとアチック・ミュージアムでの業務

1938年4月、上京した楫西は学生時代の恩師である土屋喬雄の紹介で、渋沢と出会い、アチッ

クへ加入することとなった。そして、楫西は塩業研究に取り組むことになる。その経緯については、洪沢の強い勧めがあったと言われているが、筆者は洪沢だけでなく、土屋からの勧めもあったのではないかと考える。この点については、次章で考察する。

楫西がアチックで最初に取り組んだ仕事は、「上狛文書」の整理であった。これは、現在浅田家文書と呼ばれる文書群のことと思われる。浅田家文書は、京都府上狛村の庄屋を務めていた浅野家に伝わっていた文書群で、現在は、東京大学経済学部および国文学研究資料館がそれぞれ所蔵している⁽⁵⁾。

また、1938年の秋には、伊豆川浅吉、岩倉市郎らとともに新潟県村上町および村上本町（どちらも現村上市）で三面川のサケ漁について調査を行っている。調査内容は、村上鮭産育養所の訪問、



写真1 村上城址から見た旧村上城下町と三面川（筆者撮影）

よって「越後三面川鮭漁業の史的考察」としてまとめられている [伊豆川、1940]。この村上での調査が、アチック加入後に楫西が初めて経験したフィールドワークであった。

2) 日中戦争と人民戦線事件

楫西がアチックに加入した1938年の日本は、どのような状況にあったのだろうか。

1937（昭和12）年7月7日、中華民国の盧溝橋で日本軍と中華民国軍が軍事衝突したことをきっかけに、日中戦争が勃発した。1938年を迎えてもなお戦争は終わることなく、日本国内では物資の統制が進められていった。やがて、日本が中国との戦争を継続したまま、1941（昭和16）年12月8日に真珠湾攻撃・マレー半島進攻を行ったことで、戦争はアジア・太平洋戦争へと発展することとなる。

日中戦争が勃発した年の12月には、人民戦線事件が発生した。この事件は、山川均や荒畑寒村など社会主義者の知識人が一斉に検挙された事件で、検挙者は400名以上に及んだ。さらに、翌年2月には大内兵衛や美濃部亮吉といった研究者も検挙されるに至った [判沢、2010、243-244頁]。この事件は、楫西の恩師でもあった土屋喬雄にも大きな影響を与えた。当時、土屋は日本資本主義論争における、労農派の論客として活躍していた [土屋、1984、62-66頁]。日本資本主義論争とは、1920年代後半から1930年代前半にかけて、「講座派」と呼ばれる知識人と「労農派」と呼ばれる知識人の間で、日本資本主義の性格をめぐる論争である。この論争では様々な議論が行われたが、その一つに明治維新の性格をめぐる論争がある。講座派は明治維新を近代ブルジョア革命と捉えず、日本で取り組むべきなのはブルジョア民主主義革命から社会主義革命への二段革命を唱えたのに対して、労農派は明治維新をブルジョア革命と評価して、社会主義革命を起こすべきと唱えた [山本、2002、302-303頁]。土屋は「科学的真理こそが正しい革新に誠に位役立ちうるものだ」 [土屋、1984、64頁] という意思をもって、この論争に臨んでいたが、日本政府によって最初に講座派が弾圧され、さらに人民戦線事件によって労農派の知識人が弾圧されたことで、日本資本主義論争は強制的に打ち切られることとなった。後年、土屋が述懐したところによれば、彼は日本資本主義論争が打ち切られて以降、「感ずるところがあって、他の仕事をできるだけやめ、経済史資料の刊行に没頭しよう」と決心したという [土屋、1965、序1頁]。土屋にとってこの事件は、研究者としての立場を変えざるを得なくなった大きな事件であった。

このように楫西がアチックに加入した時期は、国内外の情勢が混乱し始めていた時期にあった。次節で述べるように、楫西はアチックでの業務以外にも、土屋のもとで渋沢栄一が関わった企業の史料編纂業務に従事することとなる。その背景には、土屋が人民戦線事件以降、研究の第一線から退いていたという事情があり、それは結果的に、楫西の研究人生に大きな影響を及ぼすこととなったのである。

3) 渋沢栄一伝記資料編纂所と東京商工経済会での業務

1939年4月1日、楫西は土屋の要請で渋沢栄一伝記資料編纂所（以下、編纂所）に加入した。山口によれば、編纂所の研究所員が転属したために、土屋が渋沢に頼んで、楫西を加入させたという〔山口和雄先生古稀記念誌刊行会編、1978、93頁〕。ちなみに山口が編纂所に加入したのは1938年4月であったが、これは編纂所の研究所員が日中戦争にすることになったためであったという〔前掲書、91頁〕。編纂所での楫西の担当は、渋沢栄一が携わった事業のうち軽工業、水産業、支那に関するものの調査・研究で、水産業に関しては山口和雄が担当していた分のうち、塩業関係を担当することとなった〔龍門社、1939、1-2頁〕。編纂所に加入してからの楫西は、鐘ヶ淵紡績会社や王子製紙などの企業を訪問し、その成果を『龍門雑誌』（現在は『青淵』に改題）で報告し続けた⁽⁶⁾。編纂所の加入以降、楫西の勤務体制は、アチックと編纂所の隔日勤務となった。

また、時代は下るが、1943（昭和18）年には、土屋のもとで東京商工経済会で「東京商工会議所史」の編纂事業に従事している〔楫西、1965、242-243頁〕。この業務は、1947（昭和22）年に一段落するまで続けられた〔前掲書、243頁〕。

このように、楫西は土屋のもと、二つの編纂事業に携わった。戦後、楫西は紡績業や製糸業などの軽工業を事例に日本における産業資本の成立の研究を進めたが〔前掲書、244頁〕、この時の経験が役立ったことは間違いないだろう。

4. 塩業研究の始まり

1) 日本塩業史へのまなざし

アチックに加入した楫西は、塩業研究を担当することとなったが、この経緯については詳しいことは分かっていない。楫西と同じアチック同人だった桜田勝徳は、当時のアチックには塩業史を担当する者がおらず、塩に深い関心をもっていた渋沢が日本塩業史研究を開拓することを条件に、楫西を加入させたのではないかと推測している〔桜田、1973、解説3-4頁〕。渋沢は若い時から塩に対して非常に強い関心を抱いていた〔渋沢、1969、219頁〕。さらに、1939（昭和14）年に『塩俗問答集』が刊行されていることを考えると、楫西がアチックに加入した当時、渋沢の中で塩に対する学問的関心が高まっていたであろうことは想像に難くない。

しかし、筆者は、楫西が塩業研究に取り組むことになった背景には、渋沢の意向だけでなく、土屋の意向もあったのではないかと考える。なぜなら、土屋もまた、日本塩業について学問的な関心を抱いていたからである。1927（昭和2）年、土屋は処女作となる『封建社会崩壊過程の研究』を著している。同著には、仙台藩や加賀藩の塩業の統制政策（専売制度）について経済史的観点から分析した論考が所収されており、その中で土屋は、日本における塩の専売制度の研究について「我国のそれ（専売制度、筆者注）が却つてほとんど学者の研究の対象」にされてこなかったことを指摘しているのである〔土屋、1981、165頁〕。ちなみに、同書では専売制度について批判的な評価が下されており、土屋は同時代人の言葉を引用する形で、専売制度が領民の生活に過酷な負担をか

けたと説明している〔前掲書、760-711頁〕。この専売制度に対する批判的な姿勢は楫西の著作にも見受けられるが、後述するように、楫西の専売制度に対する批判の焦点は、塩業における技術的發展に対する抑止力となるという点であり、土屋とは異なる視点であったことに注意しなければならない。

このように、土屋は経済史的な観点から日本塩業に関心を持っていたが、前章で述べたように、1938年当時、表立って研究ができる立場にはなかった。ともすれば、土屋自身が取り組めなかった経済史的観点からの塩業研究を、彼が楫西に勧めた可能性は十分に有り得る。事実、『下総行徳塩業史』の序文で、渋沢とともに土屋の指導があったことを楫西は述べているのである〔楫西、1973、236頁〕。かくして、渋沢と土屋の指導のもと、楫西は塩業研究に取り組んでいった。

2) 七つの問題の設定―「近世塩業史の諸問題」から―

1938年、楫西は1938年9月付けの『アチックマンズリー』第38号に、「近世塩業史の諸問題」と題する論考を発表した。同書は、楫西が「塩業史を輪郭づけるために半ば手当たりばつたりに塩業関係の書物を読んで」で書かれたもので、「これ等諸問題の探求解決が、塩業史を形作つて行く」として、①起源、②開発・維持、③塩業政策、④製塩技術、⑤燃料、⑥休浜、⑦経営形態の七つの問題をあげている。以下、その七点について楫西が述べるところを要約したものを紹介する。

まず、①起源は、日本における製塩方法、特に入浜式塩田による製塩の起源についてである。楫西は、塩田の起源について南方より移住した人々が塩田を伝えたという主張があることに触れた上で、塩田の起源については「我々が近世を問題とする限り」、揚浜塩田よりも技術的な進歩を示しているとされる入浜式塩田の起源について取り上げることを提起している。

②開発・維持は、塩田の開発、そして堤防の修繕などにかかる費用の出所についてである。ここでは、坂出や赤穂など西国の塩田の開発に大坂・京都の商人が資本を出していること、行徳塩田の堤防修繕に幕府が修繕費を補助していることなどが述べられている。

③塩業政策は、塩田の保護に関する諸政策についてである。楫西は、軍用上・財政上の見地から近世期には各地で塩田の保護政策が出されていたことを述べた上で、封建制度の崩壊、国民経済の形成によって、瀬戸内海沿岸部の製塩業が発達し、逆に地方の製塩業は衰退したと主張する。

④製塩技術は、主に技術改良の問題についてである。楫西は、日本塩業の発展・技術指導には、行徳と赤穂が中心的役割を担ったとし、行徳は東北・関東地方に、赤穂は十州地方（瀬戸内沿岸部の諸国）に影響力をもっていたとする。しかし、明治時代以降に外国塩の輸入や国内塩田の衰退といった諸問題を迎えたにも関わらず、入浜式塩田の成立から現在に至るまで日本の塩業は大きな変革を見ていないと楫西は述べる。そして、その原因については「後述（具体的には⑦経営形態、筆者註）の如く塩業そのものの中に深く胚胎してある」とした上で、1905年（明治38）に施行された専売制度に対して「自由主義的發展に止めをさした」と評価を下している。

⑤燃料は、煎熬に用いる松葉や薪木、または石炭などをめぐる、藩や製塩業者の動向についてである。楫西は特に石炭に注目し、石炭による煎熬方法が伝播しても松葉焚きを続けた地域があること、石炭の存在が瀬戸内沿岸部への塩田の集中につながったことなどを指摘する。そして、楫西は燃料費の問題について述べた上で、「燃料の問題は正に重大でなければならない」という認識を示している。

⑥休浜は、江戸時代中期から明治時代前期まで十州地方で行われていた、製塩の統制政策についての考察である。楫西は各地で協定が結ばれ休浜が行われていく過程について説明した上で、それが可能だった理由を、当時大市場であった大阪地方への支配力であったとする。また、楫西は休浜

に対する評価を述べるにあたり、休浜を「自助的なカルテル運動であり、自然発生的な製塩企業改善の運動」であると主張する者もいると前置きした上で、休浜は「狭隘な市場に当面しなければならなかった業者自身の救済策」でしかなく、「発展の遅かった化学工業の微弱性によつて市場が停滞したこと」が、休浜の発生・存続の原因だったのではないかという見解を示している。

⑦経営形態は、経営者一人に対する塩田の規模についての考察である。楫西は、日本の塩業経営者一人に対する塩田の平均所有面積は三反六畝であり、これは日本の農業経営と同じように小規模経営であると指摘する。さらに労働者の雇用数も少数であり、地方によっては、釜屋（煎熬施設）の供用が行われていること、家族労働に依存していることなどを述べた上で、「この過小経営が各種の技術的改良を実施せんとする場合、殊に欧州流の技術を輸入せんとする際の困難の重なるものとして挙げられる」とする。そして、この過小経営の原因の一つとして、製塩業者に農業・漁業を兼業する者が多いことを指摘し、最後に塩田所有者である藩や塩問屋が、塩業者を小作させていたことについて説明している。

以上が、楫西が掲げた塩業研究に関する七つの問題の要約である。この論考は、塩田の修繕や燃料費などについて、経済史的な観点から分析が行われており、楫西の問題意識がよく分かるものとなっている。また、文中では全体的に瀬戸内沿岸部における製塩業が事例として何度も取り上げられており、のちに研究に取り組む行徳塩田の事例については、④で触れられているのみである。楫西の視点は、あくまでも瀬戸内沿岸部に対して向けられており、それは、論考の文末で「(塩業史の研究は、筆者注)瀬戸内十州地方にその中心を置かねばならず、他の地方に於いてもそれとの関連に於いて探求し」なければならないと述べていることから明らかである。ただし、楫西は続けて「然しこのことは地方別の考察を十州地方から取りかゝることを意味してゐない」と述べており、さらに、同号の各部報告において、「資料の関係から」行徳塩田の研究に取り掛かることが宣言されている。そして、この七つの問題に基づいて、楫西は行徳塩田の研究に取り掛かることになるのである。

なお、楫西は前述した七つの問題の他にも取り上げるべき問題として、「販売回送」、「専売法実施以後の問題等」をあげている。特に「専売法実施以後の問題等」については、④製塩技術において、「自由主義的發展に止めをさした」と断言しているように、藩や政府による統制政策について、強く批判的であった。この専売制度に対する強い批判は、彼の生涯を通して主張され続けることとなる⁽⁷⁾。

3) 行徳塩田の調査

「近世塩業史の諸問題」が発表された「アチックマンズリー」38号の各部報告によれば、楫西は「上狛文書」の整理を進めると同時に、各地の製塩の規模・製法・労働・販路などについて詳しく調べた上で、行徳地方の研究に取り掛かろうとしていた。調査地に行徳地方が選ばれた理由については、「資料の関係から」とだけ書かれている。後年、桜田は楫西が行徳を調査地として選んだ理由について、東京に近いこと、塩田に関する史料に恵まれていたこと、行徳塩田が江戸幕府の保護のもとで発展し関東地方や東北地方の製塩に影響を与えたこと、行徳塩田の衰退が瀬戸内沿岸部における製塩の発達と関わっていたことなどを楫西が考慮した結果ではないかと推測しているが[桜田、1973、4頁]、筆者も桜田の推測に同意する。もっとも、地方塩田の事例として行徳を選んだのが楫西の意思だったのか、それとも渋沢や土屋の意向だったのかは分からない。いずれにしても、楫西の研究人生の基礎となった行徳塩田の研究が、ここから本格的に始まることとなった。



写真2 旧江戸川沿いの常夜灯（筆者撮影）



写真3 法善寺（塩場寺）（筆者撮影） 写真2・写真3とも楫西が行徳の調査で訪れた場所である。

楫西が研究対象とした行徳塩田は、現在の千葉県市川市の沿岸部に存在していた塩田である。行徳塩田は江戸の近くにあったことから、近世には幕府の保護を受け、発展を続けた〔市川市歴史博物館、1982〕。しかし、江戸幕府の消滅によってその保護を失うと、行徳塩田は徐々に衰退していった。そして、1929（昭和4）年から1930（昭和5）年にかけて行われた第二次塩業整備事業によって、行徳塩田は全面的に廃止となった〔日本塩業大系編集委員会編、1976、368頁〕。楫西が研究を始めた時点で、行徳塩田はすでに過去の存在となっていたのである。

楫西は行徳塩田を研究するにあたって、まず文献調査を行った。1938年10月付の「アチックマンズリー」第39号によれば、楫西は早くも行徳関係資料の整理を終えている。また、楫西は行徳地方でのフィールドワークも行っている。1939年4月付「アチックマンズリー」第43号に、「行徳探訪記」と題する楫西の報告が掲載されている。「行徳探訪記」には、行徳地方での調査がいつ行われたのかが書かれていないが、「五六回に亘つて行徳へ出かけた」とあるので、断続的に現地調査を行っていたようである。

「行徳探訪記」によれば、楫西の調査の内容は、行徳地方の巡見、製塩企業や役場で紹介してもらった製塩業者への聞き書き、古文書の探索・借用というようなものであった。この調査の中で、楫西が出会った人物の一人に、石井亮蔵がいる。石井は行徳塩田の製塩組合長を務めた人物で、楫西は石井から、専売制度の施行（1905年）前後の塩田経営について聞き書きを行った。そして、この聞き書き調査の時に、楫西は石井から実際に使用していた塩場桶や塩場策といった製塩用具を見せてもらう機会を得て、それを「取敢へず」写真に撮ったという〔楫西、1939、1頁〕。しかし、この時撮影した製塩用具の写真は「行徳探訪記」にも、のちに刊行される『下総行徳塩業史』にも掲載されていない。これは、次節でも述べるが、楫西にとって製塩用具が研究の対象足り得なかったためではないかと思われる。

4) 『下総行徳塩業史』の刊行

1941年10月、アチックミュージアム彙報49号として、『下総行徳塩業史』が刊行された。『下総行徳塩業史』は楫西にとって処女作であり、のちに博士号取得論文ともなった研究である〔楫西、1965、240頁〕。楫西が『下総行徳塩業史』を著すにあたって重視したのは、資料の紹介であった。楫西は、同書の序文で、「本書に於て長文の資料の引用を敢てしたのはその生のまゝの紹介に重きをおいたためである」と書いている。渋沢が『豆州内浦漁民史料』の中で、「論文を書くのではない、資料を学界に提供するのである」〔日本常民文化研究所、1973、18頁〕と述べたことは有名であるが、このような渋沢の意向が『下総行徳塩業史』にも反映されていることは間違いないだろう。

『下総行徳塩業史』は全八章から構成されており、第二章「徳川幕府の保護政策」、第四章「製塩

方法」、第五章「塩田経営」、第六章「販売」、第七章「塩専売法の実施とその影響」など、楫西が先に掲げていた七つの問題に基づいた構成となっている。また、その内容は膨大な史資料の翻刻とその分析に割かれており、文献史料を補うにあたっては、若干の聞き書きデータが用いられている。そして、最大の特徴は、行徳塩田の歴史をただ記述するのではなく、瀬戸内沿岸部の塩田との比較から、行徳塩田衰退の原因を追究していく形式となっていることである。それは、序文において「その衰頹の最大の原因はやはり十州製塩業の発展に置くことが出来る。(中略)その十分な裏付けは今後続く赤穂、三田尻、撫養等の十州地方製塩等の探求によつて初めて得ることが出来るのであらう」[楫西、1973、236頁]と宣言していることから明らかである。楫西にとって、行徳塩田の研究は、瀬戸内沿岸部の塩業研究への足掛かりとして位置づけられていた。

はじめにでも述べたように、『下総行徳塩業史』は、経済史学者からも高い評価を受けている。楫西の死後に刊行された、彼の著作集である『日本産業資本成立史論』の解題では、『下総行徳塩業史』の研究的価値を「この書物は行徳塩業の発展のほとんど全般にわたって、経済史的に分析説明を行ったものである。(中略)この研究はその動機からいえば、むしろ農業史・工業史の部面における研究の進捗を念頭において、未開拓の分野たる塩業における封建的生産関係の成立、変質、解体の過程を追及しようという理論的問題意識から出発したものであるとよい」[楫西、1965、241頁]と述べている。つまり、日本資本主義の成立過程を明らかにしようとする楫西の問題意識が、『下総行徳塩業史』には反映されているのである。

なお、『下総行徳塩業史』には行徳塩田の製塩技術についても詳細に記述されているが、実際に行徳塩田で使用されていた製塩用具については、史資料からの引用による紹介に留まっている。前節で述べたように、楫西は製塩用具を実見する機会を得ていたが、それを分析することはなかったのである。そういった意味においても、『下総行徳塩業史』は楫西の問題意識を形にしたものであった。

5. 戦時体制下の研究生活

1) 物資統制の強化

1937年7月7日に勃発した日中戦争が長期化する中で、国内では政府による物資の統制が行われた。日中戦争の開始後、毛製品、木綿製品、鉄鋼、生ゴムなどの統制が行われたが、1939年の後半には米国や木炭といった国民の生活に関わる物資が不足し始め、節制が求められるようになった[源川、2017、68-70頁]。また、政府は戦地及び国内への食糧供給を維持するために、国策グラフ誌『写真週報』を通して、食糧増産や節食を国民に呼びかけるようになった[小田、2012、85-122頁]。

物資の統制が進められる中で、塩の統制も行われた。小澤利雄によれば、日中戦争の勃発以降、塩田補修用の資材の入手難や、労力不足などもあって、国内の塩の生産量は減少していったという[小澤、2000、135-136頁]。さらに、戦争の勃発によって国外からの輸入塩も減少したことで、塩の供給量も減少した。そこで、政府は1942(昭和17)年1月に塩配給制を制定し、同年5月には自家用製塩の製造を一般にも許可した。ただし、塩の配給については1人あたり月400グラムの支給であり、人間が生命維持をする上での最低必要量を下回っていた[前掲書、136頁]。

このように戦時下の日本では、物資の統制が行われ、さらに生活必需品である米や塩が不足するという状況が続いていた。特に塩の統制政策は、楫西の研究にも影響を及ぼすこととなった。以下、その影響について見ていきたいと思う。

2) 製塩技術史研究への着手

『下総行徳塩業史』の執筆と並行的に、楫西は製塩技術史の研究に着手している。『下総行徳塩業史』の刊行に先立つ1941年6月、アチックから『渋沢漁業史研究室報告』第1輯が刊行され、楫西の執筆した「明治年間に於ける枝条架製塩並に機械製塩」も同誌で発表された。この論考は、文末に「二六〇〇、一一、三」とあるので、1940年(=皇紀2600年)11月3日に執筆を終えたものと思われる。「明治年間に於ける枝条架製塩並に機械製塩」は、三章からなる。一章では、日本の塩業が塩田によるものを中心に行われてきたことを述べたのち、明治前期に提言された製塩の改良に関する意見と全国各地に設置された製塩試験場の紹介をしている。第二章では、採鹹技術の改良のために、各地の製塩試験場で行われた枝条架式製塩の実例の紹介、第三章では、煎熬技術の改良のために、各地の製塩試験場で行われた機械製塩の実例を紹介している。そして、最後に楫西は明治期に行われた機械製塩がほとんど失敗に終わった原因として、資本及び技術が不完全であったこと、日本の塩田経営が小規模であるために設備が設けられないこと、製塩業者が専売制度の保護のもとで技術改良に取り組んでこなかったことを指摘している。

翌1942年8月、アチック・ミュージアム改め、日本常民文化研究所は『渋沢水産史研究室報告』第2輯を刊行した。同誌には、楫西の「製塩業に於ける釜竈の変遷」も掲載された。この論考は、日本の製塩業における煎熬設備である釜・竈の歴史の変遷を、燃料費の節約という観点から分析したもので、燃料の変化や製塩方法(真塩焚・差塩焚)の違いなどによって、使用されていた釜・竈の種類が違っていたことが指摘されている。なお、同論考は「資料の関係から明治年間を主とし」ており、専売制度が施行された1905年以降の変遷については取り扱われていない。

この二つの論考が発表されている間に、日本の対外戦争は、日中戦争からアジア・太平洋戦争へと発展しているが、「明治年間に於ける枝条架製塩並に機械製塩」にも、「製塩業に於ける釜竈の変遷」にも、戦時体制に迎合するような直接的な表現は見られない。しかし、「明治年間に於ける枝条架製塩並に機械製塩」で最後に指摘されている専売制度に対する評価が、政府への批判ではなく、製塩業者に対する批判となっていることには注意しなければならない。当時、戦時体制下にあった日本では、政府による物資の統制政策が進められていた。このような状況下で、政府による塩の統制政策である専売制度を直接的に批判することは、楫西にとって研究を続けて行くうえでは危険な行為であったろう。その結果が、製塩業者の怠惰を誘発したという婉曲的な形での専売制度批判となったのではないだろうか。また、楫西がこれらの技術改良の研究を行ったことは、決して彼自身の学問的関心からだけではなかった。それは、後述するように、日本国内で塩が不足している状況において、楫西の塩業研究は社会的期待に応えられる研究であった。戦時体制の強化は、目に見える形で楫西の研究に影響を与え始めていた。

3) 坂出の訪問と久米栄左衛門の顕彰

1941年の秋、楫西は瀬戸内沿岸部の塩田の視察に赴いている。その道のりは不明だが、楫西は塩田を視察する途中で、香川県の坂出町(現坂出市)に立ち寄った。そこで楫西は、鎌田共済会の運営する郷土博物館を訪問し、博物館の主事である岡田唯吉の厚意により、坂出塩田の開発に関する史資料の閲覧、借用を行っている。

岡田は、当時の香川県では著名な郷土史家であった。岡田は、1922(大正11)年に鎌田共済会の調査部主事となり、1925(大正14)年5月に郷土博物館が開館すると博物館主事も兼任し、展示活動や郷土史の研究・調査に尽力した[学芸・あゆみ班、2014、7-8頁]。特に岡田が力を注いだのが、坂出塩田の開発に携わった久米栄左衛門通賢の業績に関する研究で、1928(昭和3)年、岡田

は久米の伝記本である『讃岐偉人久米栄左衛門翁』を出版した。様々な史資料を基に書かれたこの本は、現在も久米の研究をする上での基本文献として評価されている。[久米通賢研究会、2010、30-31頁]。また、岡田はアチック関係者が行った調査にも協力している。例えば、宮本記念財団に保存されている宮本勢助による「山袴全国付言調査紙」の中には、岡田が返信したハガキがある[加藤編、2012、206頁]。また、渋沢による『塩俗問答集』の協力者の中にも、岡田の名を見ることができる[渋沢敬三編、1969、序6頁]。このように、岡田はアチックの関係者にも名を知られた郷土史家であり、さらに久米通賢研究の第一人者とも言える立場にあった。楢西が岡田のもとを訪れたのは、必然的なことであったのである。しかし、この時の調査成果が公表されるのは、楢西の死後のこととなる。

1942年10月6日、楢西は岡田から借用した史資料をもとに、「坂出塩田開墾事情—久米栄左衛門塩業事績—」を執筆した。宮本常一によれば、この論考は本来、『渋沢水産史研究室』第三輯に掲載されるはずのものであったが、印刷の段階に入った際に印刷所が空襲で焼けてしまったために、刊行されることはなかったという[日本塩業研究会編、1964、はしがき]。しかし、宮本常一のもとに校正刷の原稿が残っており、後日、楢西にその原稿は渡された。そして、1964(昭和39)年3月付で刊行された『日本塩業の研究』第7集に、同論考が掲載されたのであった。なお、この年の3月に楢西が急死したため、結果的にこの論考は彼の遺稿となった。

この論考の特徴は、題名からも分かるように、久米を顕彰する表現が文中にいくつか見受けられることである。たとえば、久米が高松藩に提出した塩田開墾の建白書の一文を引用する形で、「一命を「国家貧民」のためにささげんとする栄左衛門の決意は誠に胸を打たれる思いがする」[楢西、1964、12頁]と記している箇所や、「久米式の名を冠して全国に模範たる坂出塩田はそのすべてを栄左衛門に負うものと云うことが出来る」[前掲書、56頁]と記している箇所があげられる。特に、「一命を「国家貧民」のためにささげんとする」という文は、戦時体制への迎合をうかがわせるような表現であるが、この類の表現がなされている箇所は他に見当たらない。むしろ、内容としては、岡田から拝借した古文書の中から、坂出塩田開発の経緯や高松藩による塩田の保護政策、塩田開発における塩問屋の存在、堤防工事の費用など、楢西が掲げていた七つの問題に関わる内容の分析に費やされている。このことを考えると、「一命を「国家貧民」のためにささげんとする」という記述に見られる、久米の顕彰は、戦時体制下において研究を続けるための大義名分だったのではないだろうか。



写真4 久米通賢の像(筆者撮影)



写真5 坂出神社
1934(昭和9)年創建。久米通賢の他、松平頼恕などが祀られている。(筆者撮影)

なお、久米通賢研究会によれば、1943（昭和18）年から1944（昭和19）年にかけて、久米の伝記本が三冊刊行されている〔久米通賢研究会編、2010、31頁〕。これらの伝記本には戦時を反映した内容が随所に見られ、また、化学工業においては塩が重要であったことから、本のタイトルに「塩」の言葉が付けられているものもあるという〔前掲書、同頁〕。楫西がこうした状況を意識して久米を研究の題材に選んだかは不明であるが、国防という観点からも塩が重要視され、戦時下に塩田開発に尽力した人物の顕彰活動が行われていたことは、時代背景を考える上でも、決して無視できない事実である。

4) 『海洋の科学』への寄稿

1942年12月、日本海洋学会が刊行する『海洋の科学』第2巻第12号（塩の特集号）に、楫西による「塩の歴史」という論考が掲載された。同論考は古代から1905年に専売制度が施行されるころまでの日本の製塩技術について記したもので、明治期における枝条架式製塩の実験や、釜・竈の材料や煎熬燃料の変遷など、「明治年間に於ける枝条架製塩並に機械製塩」、「製塩業に於ける釜竈の変遷」を下敷きとしたものとなっている。

この論考には、戦時体制に迎合するような直接的な表現は見られないが、当時の国内における塩の不足を意識して書かれたものであったと考えられる。それは、「塩の歴史」が掲載された『海洋の科学』第2巻第12号の編集後記からも明らかである。同誌の編集後記には、「塩の歴史」は、「昔の製塩技術について文献を蒐集して」いるアチック・ミュージアムに所属する「楫西氏に昔の塩の製造法を執筆して戴」いたものとあり、「塩の歴史」が日本海洋学会からアチックへの依頼を受けて書かれたものであったことが分かる。さらに、編集者は「塩の歴史」を読んで、「古人も亦、合理かつ経済的に製造し工夫した様子を知ることが出来た」と感想を述べている。つまり、編集者は楫西の論考を読んで、製塩技術の改良に取り組んでいた専売制度施行以前の製塩業者と、塩が不足する中で増産を図ろうとする戦時下の人々の姿を重ねているのである。

この『海洋の科学』には、楫西以外のアチックメンバーも論考を投稿している。筆者が確認した限りでは、楫西に先立って山口和雄が「漁具の変遷」〔山口、1942〕を、楫西の後には伊豆川浅吉が「捕鯨の歴史」〔伊豆川、1943〕を、宮本常一が「海の遭難と民間の防災」〔宮本、1944〕を、それぞれ執筆している。いずれも文末に「日本常民文化研究所」と記されているので、楫西同様、日本海洋学会から依頼を受けて書かれたものと考えられる。また、山口らの論考にも、戦時体制に迎合するような直接的な表現は見られないが、これらの論考も、戦時体制下における国内の状況を強く意識して書かれたものであることは想像に難くない。それは、伊豆川の論考が掲載された『海洋の科学』第3巻第11号の編集後記において、「如何なる雑誌、如何なる発言と雖も、今日に於ては政治的発言ならざるはない今日、ひとり自然科学のみが超国家的、超個人的なることは許されない」と表明されていることから明らかである。膨大な水産史史料を所蔵し、その研究に取り組むアチックの存在は、他の研究団体から見ても魅力的な存在であった。特に、食料や物資の増産が至急の課題であった当時において、アチックの研究は、社会的期待にも十分に応えられるものであった。そして、それは同時にアチック同人もまた、戦争との関わりを意識せずに研究を進めることが不可能な時期を迎えていたということに他ならないのである。

6. まとめ

以上、アチックでの楫西の塩業研究について、分析を行ってきた。日中戦争の真ただ中であっ

た1938年、楫西はアチックに加入した。桜田が述べているように、楫西にとって塩業研究は専門分野ではなかったが、渋沢や、研究の第一線から退いていた土屋の指導のもと、経済史的観点から塩業研究に取り組んでいった。楫西は様々な文献を読んでいく中で、日本塩業の研究には七つの問題があると考え、その問題を明らかにするために行徳塩田の研究や製塩技術史の研究を進めた。しかし、日本の対外戦争がアジア・太平洋戦争へと発展し、日本国内で物資の統制・増産が推し進められていくと、楫西は国策との関わりの中で塩業研究を続けざるを得なくなっていった。その背景には、アチックに対する社会的な期待もあった。楫西は、その期待に応えつつも、自身の関心に基づいて研究を行っていたのである。

本稿では、これまでアチックの研究では取り上げられてこなかった楫西光速の塩業研究を分析対象とし、渋沢水産史研究室における経済史的側面を明らかにした。アチック関係者による塩の研究と言えば、渋沢の『塩俗問答集』や、彼の視点を引き継いだ宮本による「塩の道」などが想起されるが、楫西による塩業研究は、これらの人類学的・民俗学的関心に基づいたものとは異なり、経済史的関心に基づいたものであった。それは、彼の塩業研究の中で民俗が研究対象として挙げられていないこと、『下総行徳塩業史』で行徳塩田における製塩技術を詳細に記述しながらも、製塩用具の分析に目を向けなかったことなどからも明らかである。塩業研究を通して、経済史的な観点から日本資本主義の成立を分析することが楫西の持つ問題意識であり、その視点こそがアチックにおける楫西の役割でもあったのである。

7. 終わりに

最後に、戦後の楫西の動向について、塩業研究に関するものを中心に紹介していく。

戦後、楫西は財団法人水産史研究会、専売局、法政大学などに勤めたのち、1951（昭和26）年、東京教育大学の教授となった。この間も、楫西は「塩を造った歴史」〔内藤民治編『新歴史』第1巻第2号、1946、77-84頁〕、「日本塩業史物語」〔大蔵省専売局編『財政と専売』第1巻第6号、24-26頁〕など、塩業に関する研究を続けていた。1952（昭和27）年には、『日本社会民俗事典』の編集委員を勤め、自らも「製塩」、「企業組織」、「近代産業」、「工業」といった様々な項目の執筆も担当した。1955（昭和30）年と1957（昭和32）年には、日本常民文化研究所から刊行された『常民文化論集』1と『日本水産史』に、それぞれ「日本製塩技術の発達—古代・中世—」と「製塩」を寄稿している。1961年には日本塩業研究会の顧問に宮本とともに就任した。同会の設立に携わった加茂詮によれば、楫西との最初の出会いは、向坂逸郎の紹介によるものであったという〔加茂、2015、218-219頁〕。楫西は、同会の顧問として研究会に何度も顔を出していたが、1964年3月13日、日本専売公社美竹会館における塩業研究会の席上で心筋梗塞によって倒れた。そして、同年3月19日、楫西は日本専売公社の病院で逝去した。渋沢の死から約5か月後のことであった。楫西の死の翌年に刊行された『日本産業資本成立史論』の解題は、彼の研究人生を「楫西博士の経済史研究は「塩」にはじまって「塩」で終わったわけなのである」と評している〔楫西、1965、242頁〕。楫西にとって塩業研究は、彼の人生を決定づけた正にライフワークであった。

注

(1) 祭魚洞文庫は、①アチックが収集した蔵書、②漁業史研究室、の二つを指す場合があるが、ここでは②漁業史研究室のことを指す。

- (2) アチック同人の回顧録としては、山口和雄古稀記念誌刊行会編『黒船から塩の道まで』や、宮本常一『自伝抄』などがあげられる。
- (3) 近藤雅樹編『図説・大正昭和 くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム—』、2001、河出書房新書、128頁。
- (4) 前掲書、155頁。
- (5) 東京大学 経済学図書館・経済学部資料室「浅田家文書仮目録について」、作成年不明、〈<http://www.computer-services.e.u-tokyo.ac.jp/lns/asadake/asada2.html>〉、2018年9月25日閲覧。
- (6) 例えば、『竜門雑誌』607号、609号、610号、612号、613号（いずれも1939年）には、紡績会社に関する調査報告が、同誌614号、615号（どちらも1939年）には王子製紙に関する調査報告が掲載されている。
- (7) 例えば、1946（昭和21）年に『新歴史』第1巻第2号で発表した「塩を造った歴史」では、専売制度について「鎖国の生産の殻に閉ぢ込めることによつて却つて生産ならびに技術の停滞を齎し」[楫西、1946年、30頁]たと楫西は述べている。また、1962年に『塩業時報』第14巻第8号に発表した「日本塩業史研究の問題点」では、専売制度について「製塩方法の改革を妨げ、いつまでも古い塩田法を温存し続けるのに、きわめて有力な役割を果たしたのであった」と述べている。

参考文献

アチック・ミュージアム編

1938a 『アチックマンスリー』第35号、アチック・ミュージアム

1938b 『アチックマンスリー』第36号、アチック・ミュージアム

1938c 『アチックマンスリー』第38号、アチック・ミュージアム

1938d 『アチックマンスリー』第39号、アチック・ミュージアム

1940 『季刊アチック』No.1、アチック・ミュージアム

伊豆川浅吉

1941年 「越後三面川鮭漁業の史的考察」アチック・ミュージアム編『渋沢漁業史研究室報告』第1輯、155-204頁

1943 「捕鯨の歴史」三宅泰雄編『海洋の科学』第3巻第11号、22-31頁、小山書店

小澤利雄

2000 『近代日本塩業史—塩専売制度下の日本塩業—』、大明堂

小田義幸

2012 『戦後食糧行政の起源—戦中・戦後の食糧危機をめぐる政治と行政』、慶應義塾大学出版会

学芸・あゆみ班

2014 「郷土博物館のあゆみ—（3）調査部とは何か」鎌田共済会郷土博物館編『郷土白博通信』No.4、7-8頁、鎌田共済会郷土博物館

楫西光速

1938 「近世塩業史の諸問題」アチック・ミュージアム編『アチックマンスリー』第38号、1-3頁、アチック・ミュージアム

1939 「行徳探訪記」アチック・ミュージアム編『アチックマンスリー』第43号、1頁、アチック・ミュージアム

1941 「明治年間に於ける枝條架製塩並に機械製塩」渋沢漁業史研究室編『渋沢漁業史研究室報告』第1輯、205-232頁、アチック・ミュージアム

1942a 「製塩業に於ける釜竈の変遷」渋沢水産史研究室編『渋沢水産史研究室報告』第2輯、85-111頁、日本常民文化研究所

1942b 「塩の歴史」三宅泰夫雄編『海洋の科学』第2巻第12号、22-30頁、小山書店

1946 「塩を作った歴史」内藤民治編『新歴史』第1巻第2号、77-84頁、新歴史協会

1948 「日本塩業史ものがたり」大蔵省専売局編『財政と専売』第1巻第6号、24-26頁、大蔵省専売局

1954 「入浜塩田法の発達」東京教育大学文学部編『社会科学論集』創刊号、43-94頁、東京教育大学文学部

1955 「日本製塩技術の発達—古代・中世—」桜田勝徳他『常民文化論集』1、257-298頁、日本常民文化研究所

1957 「製塩」日本常民文化研究所編『日本水産史』275-305頁、角川書店

1962a 「お正月今昔」佐藤和孝編『塩業時報』第14巻第1号、7-9頁、塩業組合中央会

1962b 「日本塩業史研究の問題点」、佐藤和孝編『塩業時報』第14巻第8号、1-3頁、塩業組合中央会

1964 「坂出塩田開墾事情—久米栄左衛門塩業事蹟—」日本塩業研究会編『日本塩業の研究』第7集、3-57頁、塩業組合中央会

- 1965 『日本産業資本成立史論』、御茶の水書房
- 1973 「下総行徳塩業史」日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書』第4巻、1973年、235-568頁、三一書房（原著：楳西光速『アチック・ミュージアム彙報49号 下総行徳塩業史』、1941年、アチック・ミュージアム）
- 加藤幸治編
- 2012 「宮本勢助「山袴全国方言調査紙（昭和9年）」」東北学院大学学術研究会編『歴史と文化』第48号、41-231頁、東北学院大学学術研究会
- 加茂詮
- 2015 『私の二〇世紀—“最後” ずくめの記—改訂版』、私の二〇世紀慣行委員会
久米道賢研究会編
- 2010 『もっと知りたい！ 久米道賢』、鎌田共済会
- 近藤雅樹編
- 2001 『図説・大正昭和 くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム—』、河出書房新書
桜田勝徳
- 1973 「第四巻 水産篇（3）解説」日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書』第4巻、解説1-6頁、三一書房
- 渋沢敬三編
- 1969 『塩俗問答集—常民文化叢書3—』、慶友社
市立市川歴史博物館編
- 1982 『中世以降の市川・展示解説』、市立市川歴史博物館
日本塩業研究会編
- 1958 『日本塩業の研究』第1集、香川県塩業組合連合会塩業展望編集部
- 1964 『日本塩業の研究』第7集、塩業組合中央会
日本塩業大系編集委員会編
- 1976 『日本塩業大系 特論地理』、日本専売公社
日本常民文化研究所編
- 1973 『日本常民生活資料叢書』第15巻、三一書房
日本民族学協会編
- 1952 『日本社会民俗事典』第1巻（あ〜こ）、誠文堂新光社
- 1954 『日本社会民俗事典』第2巻（さ〜ち）、誠文堂新光社
- 1957 『日本社会民俗事典』第3巻（つ〜ほ）、誠文堂新光社
- 1959 『日本社会民俗事典』第4巻（ま〜わ）、誠文堂新光社
高橋毅一編
- 1939a 『龍門雑誌』第607号、龍門社
- 1939b 『龍門雑誌』第608号、龍門社
- 1939c 『龍門雑誌』第609号、龍門社
- 1939d 『龍門雑誌』第610号、龍門社
- 1939e 『龍門雑誌』第612号、龍門社
- 1939f 『龍門雑誌』第613号、龍門社
- 1939g 『龍門雑誌』第614号、龍門社
- 1939h 『龍門雑誌』第615号、龍門社
土屋喬雄
- 1965 「楳西光速君の思い出の一端—序にかえて—」楳西光速『日本産業資本成立史論』、序1-3頁、御茶の水書房
- 1981 『復刻版・封建社会崩壊過程の研究』、象山社
- 1984 「私の履歴書」日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人17』、7-81頁、日本経済新聞社
判沢弘
- 2012 「労農派と人民戦線—山川均をめぐる—」思想の科学研究会編『共同研究 転向4—戦中篇 下』、185-298頁、平凡社
- 源川真希
- 2017 『日本の歴史6・総力戦の中の日本政治』、吉川弘文館
宮本常一
- 1944 「海の遭難と民間の防災」三宅泰雄編『海洋の科学』第4巻第1号、30-41頁、小山書店
- 1979 「塩の道」山田宗陸他『道の文化』、197-245頁、講談社

- 2002 「自伝抄—二ノ橋界限—」田村善次郎編『父母の記／自伝抄』（宮本常一著作集 42）、未來社
山口和雄
- 1943 「漁具の変遷」三宅泰雄編『海洋の科学』第 2 卷第 9 号、53-60 頁、小山書店
山口和雄先生古希記念誌刊行会編
- 1978 『黒船から塩の道まで』、財団法人日本経営史研究所
山本義彦
- 2002 「日本資本主義論争」石井寛治他編『日本経済史 3・両大戦間期』、301-306 頁、東京大学出版会